

# 会派視察・研修報告書

会派名 公明党

代表者名 寺島 芳枝

1 日にち	令和7年11月4日(水)～6日(木)
2 視察先 研修名、主催者及び会場	石川県輪島市・珠洲市 能登研修会 主催:全国ボランティア議員連盟
3 参加者	寺島 芳枝 片山 竜美
4 調査・研修の テーマ	令和6年1月1日発生した能登半島地震の被災地をめぐり、現地を視察し、現場の声を聴くことにより、復興の進捗状況とその課題について学ぶ。
5 主な内容	研修1 浦上公民館館長 喜田充氏 研修2 輪島市役所健康福祉部長 河崎国幸氏 視察1 輪島市内見学 奥能登広域事務組合危機管理官 佐藤令氏 研修3 珠洲市防災アドバイザー 酒井明子氏
6 所感、提言事項、課題等	<p><b>【寺島芳枝】</b></p> <p>初めに今回の研修会が実現したのは、全国災害ボランティア議員連盟副会長で、NPO 法人 V ネット理事長・岐阜県議会議員川上哲也氏が能登半島地震時のボランティア活動として1月2日に食料支援等を行い、その後に、輪島市からの要請を受け、門前地区・輪島地区に「飛騨高山の湯」大型入浴施設を設置するなど、現地との信頼関係の上と明記したい。</p> <p>研修1、輪島市門前町浦上公民館館長 喜田充氏</p> <p>発災時浦上地区では、家屋半壊から全壊で公民館へ避難するが、公民館ホールの南側窓が破損、周辺の地割れや瓦の落下、館内散乱、上下水道管破損の被害があった。</p> <p>1月1日は公民館が使用不可。ビニールハウスを借用し、車中や焚き火で徹夜。1月2日より公民館内外のかたづけと運営所の設営(動ける者全員に指示)。避難所が安全とは限らないことを改めて知る。</p> <p>当初の避難所運営は館長の指示により、各部門責任者を決め、住民主体の避難所として運営された。館長が区長会長を務めるなど、人材を含めて誰よりも地域を知る方だったのが大きいと感じた。そして何より大きかったのが、婦人会による3食の温かい食事の提供が出来たことが、生きる力となったこと(三日間はほぼ3食餅中心)。日頃のコミュニティが功を奏した事は言うまでもないが、改めてコミュニティの大切さを実感した。</p> <p>通信設備は、ソフトバンク以外は不通。その後、NTTの固定電話と衛星通信車を配置。避難所に参集しなかった人からの情報が皆無との実態から、衛星通信など通信技術に関する訓練も必須であると感じた。</p> <p>研修2、輪島市役所健康福祉部長 河崎国幸氏</p> <p>「市立輪島病院における現場対応の実際とBCP」</p> <p>電気は一時非常用電源が稼働、上水道はタンク内残量のみ、下水道</p>

は、使用不可で配管が全て断裂。水が使えないことがトイレの不衛生となり、病院としての機能が果たせない。4日目の夜、千葉県からトイレトレーラーが到着し、5日目から使用。劇的に衛生環境が改善した。改めてトイレの備えの重要性を感じる。災害時応急対応と業務継続に必要な「モノ」三位一体、スタッフと医療敷材と施設(ライフライン・配管)。

法令遵守に基づく福祉避難所の運営は、いざ災害が起こると矛盾が起きる。災害救助法と介護保険法による費用の算定により、その後の保険料に跳ね返らない施策が必要であること、要支援者、高齢者は福祉避難所へ、要介護者は介護施設へが基本となることは盲点であった。今回の地震では特例減免が行われたが、平常時でのシミュレーションが必要であることなど、課題は大きいと感じた。

視察1、奥能登広域事務組合危機管理官 佐藤令氏の案内で輪島市内を視察。まだまだ応急措置のままであるのは、道路下での配管工事を済ませないと二重の工事になり、費用がかかることが起因していた。市役所や公民館の入り口の段差もそうだが地震の凄まじさを肌で感じる貴重な視察となった。

研修3、議連顧問であり、議連を上げた元福井県会議員東角操氏

発生2日目から行政支援「カウンターパート方式」が入り、防災協定を締結している自治体側との顔の見える関係を作っておくことの重要性や、事前防災(どの道、どの拠点)について、珠洲市近郊在宅避難者宅を水を持ちながら傾聴、御用聞きに周り、DMAT や災害看護に引継ぐ活動について報告があった。

研修4、災害看護プロジェクトリーダー、珠洲市防災アドバイザー酒井明子氏

酸素の提供、公民館等への酸素ボンベの設置、災害用ボンベが課題(在宅で酸素を必要とする方の名簿作り)。災害関連死を無くす活動では、地道な訪問活動とコミュニティ作り、要支援者名簿の更新は必須である。

総括して、心に寄り添うこと、自ら前を向けるヒントを与えられたら最高である。地域コミュニティがあることで、行政任せでない避難所は自立が早い。情報共有会議などによる連携がうまくいく要因など多くを学ぶ機会となった。今後の多治見市に活かしていきたいと思う。

【片山竜美】

・喜田浦上公民館館長からは、実際に被災され、避難所を運営されたりリアルなお話を聴かせていただいた。特に、「マニュアルは役に立たない」、「市職員の動きが遅い」、「支援に来た自衛隊と市の職員の指示に齟齬あった」等は、現場にいたからこそ実感できる言葉であった。

・さらにトイレや風呂、温かい食事の重要性や避難所の運営にあたっての留意点なども教えていただいた。

・河崎部長からは「激甚災害発生時における病院と福祉施策の在り方について」の講話をいただいた。

・輪島病院事務長として、能登半島地震発生直後に訪れた「災害拠点の機能を失った瞬間」、「BCPが機能しなくなった瞬間」の2つの瞬間を失ったことを力説。それがいかに大変で、患者さんと避難してきた方の生命を守

るために奔走した経験をもとに、「院内BCP」の見直しをされたことや、特に「スタッフ・医療資機材・施設(ライフライン・配管)」の三位一体を訴えられた。

・次に「福祉避難所」について、避難対象者などの法律上の立て付けについて教えていただいた。また、福祉避難所において「協定の締結」から「マニュアルの作成」、そして「訓練の実施」の3本柱についてお話があり、特に避難訓練が重要であり、その訓練が今回の震災で生きたことを学んだ。さらに訓練の実施には、福祉避難所と職員の粘り強く、丁寧な対話があったことも教えていただいた。

・河崎部長の言葉の中で「震災は休日や夜間に発生する。したがって、動ける職員がいないことを想定したマニュアルを作成する必要がある」が印象的であった。その言葉通り、災害マニュアルの改訂を進めている。

・佐藤危機管理官とは、震災の爪痕が残る海岸や輪島朝市、門前町などを見学した。また、バス内から道路の再建や斜面が崩れた跡も見ることができた。

・解体から復興へようやく歩み始めているが、完全な復興までまだまだ時間がかかるため、ぜひ観光を含めた支援をしていただきたいとのことであった。

・また、「輪島市役所の修復は最後」の言葉が印象的であった。実際、玄関口などはかなり壊れていた。まずは市民優先。そんな心意気が感じられた。

・珠洲市で防災アドバイザーを務める酒井福井大名誉教授からは「災害現場は語る～いのちと生活を守るため」と題した講演があった。

・そこでは、「能登半島地震、繰り返される災害」「災害関連死をどう防ぐか」「福祉避難所および福祉サービス」の3点にわたっての講話であった。

・その中で、住民の声がデータ化や、ワーキンググループをつくって情報を共有する取り組みがあった。

・個人情報を含めて、緊急時の場合は、国や自治体、関連団体と情報共有することが、被災者を迅速に救っていくためには重要である。

・災害関連死の分析をし、人命救助のための効果的な手立てを研究しているともあった。

・そのほか様々な角度から話があったが、被災地に入り、住民とも対話し、個別避難計画も一緒に作るなど、積極的に現場の声を聴く教授の言葉はたいへんリアルであった。

\* 今回の研修では、避難所運営者、行政(市職員)、防災専門家、それぞれの立場で話を聴くことができ、大変有意義であった。ここで学んだことを多治見市版に落とし込み、さらに多治見市が安心・安全な街になるよう、取り組んでいきたい。

7 写 真 等

※視察の場合は必須、研  
修の場合は任意



※視察先、研修先ごとに1枚作成すること。

※「6 所感、提言事項、課題等」は、参加者全員分を記載すること。